

## ピレスロイド剤を使用しない夏秋きゅうりのワタアブラムシ防除体系

(園試環境部)

### 1. 背景とねらい

ピレスロイド剤はワタアブラムシに卓効を示すためきゅうりの基幹防除剤として広く使用されてきた。しかし、園試圃場では平成5年に効力低下が初めて確認され、本年は著しく効力低下した。このことは県内各地で認められており、防除上大きな問題となっている。一方、有望な新規薬剤が数種類登録された。そこで、新規薬剤の使用法を明らかにするとともに、既存の薬剤と併せてピレスロイド剤を使用しないワタアブラムシの防除体系について検討した結果、成果が得られたので参考に供する。

### 2. 技術の内容

(1) ピレスロイド剤が効力低下した夏秋きゅうり栽培では、表1に示した防除体系Ⅰ～Ⅳのうちから一つ選んで防除する。

表1 ピレスロイド剤を使用しないワタアブラムシ防除体系

	5 月		6 月			7 月				8 月				9 月			
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16 (週)
	● 定植																
						収穫											
	重点防除時期										防除時期						
[防除体系]																	
Ⅰ	↑ B 1			↑ C 2			↑	↑ A B 2		↑	↑ D D		↑ B 2			↑ (A)	
Ⅱ	↑ B 1			↑ C 2			↑ B 2		↑	↑ A C 2			↑ B 2			↑ (A)	
Ⅲ	↑ C 1					↑ B 2		↑	↑ A C 2			↑	↑ A B 2			↑ (A)	
Ⅳ	↑ C 1					↑ B 2		↑	↑ A C 2			↑	↑ D D			↑ (A)	

記号は表2参照、↑は散布時期を示す、( )は発生量や天候により省略できる場合が多い

ア. 定植時の粒剤施用と茎葉散布剤を組み合わせた体系防除とする。

イ. 土壌施用剤は移植鉢に散粒して定植する。

ウ. 茎葉散布剤については、有効な薬剤を3～4剤選択して残効期間を考慮に入れたローテーション散布を行い、同系統の薬剤は連用しない。

(2) 防除薬剤および残効期間は表2のとおりである。

表2 ワタアブラムシの防除薬剤と残効期間

使用方法	系統	薬剤名	施用量、濃度	残効期間(日)
定植時 土壌施用	B1	オンコル粒剤	1g/株	30
		ガゼット粒剤	1g/株	30
	C1	アドマイヤー1粒剤	1g/株	40
茎葉散布	A	スミチオン乳剤	1000倍	10~14
		DDVP乳剤	1000~1500倍	7
		マラソン乳剤	2000倍	7
	B2	アリルメート乳剤	1000倍	14
	C2	アドマイヤー水和剤	2000倍	21
	D	オレート液剤	100倍	10
	E	ピレスロイド剤	県防除基準参照	0~21

A：有機燐剤 B：カーバメート剤 C、D：その他

### 3. 指導上の留意事項

(1) 表2に示した茎葉散布剤は露地栽培ではいずれも収穫前日まで使用できる。施設栽培ではロデー乳剤は収穫3日前までであり、DDVP乳剤は使用できない。

#### (2) 新規薬剤の特徴と注意事項

##### ア. アドマイヤー水和剤

- ・浸透移行性があり、残効期間は非常に長い。
- ・抵抗性発現を回避するため、定植時にアドマイヤー1粒剤を使用した圃場では、1回目と2回目の茎葉散布剤に本剤を使用しない。
- ・他害虫に対する効果はない。

##### イ. オレート液剤

- ・アブラムシの気門を塞いで窒息させる物理的な効果を有するので、抵抗性が発現しにくい。
- ・残効期間は中であるが、多発時や有翅虫の飛来時期の散布は効果が劣る。また、1回散布より7日間隔の2回散布のほうが効果が高い。

(3) ワタアブラムシはピーマン、キク、リンドウなど多く作物に寄生するので、これら作物でもピレスロイド剤の過剰使用や連用を避ける。また、効力低下が認められた場合、登録農薬は異なる場合があるが、きゅうりを参考に他剤を選択する。

### 4. 試験成績の概要 (略)